

民俗芸能を守り抜く里

昼間の森に現れる妖精
 夜の森に響く拍子木
 祖谷の民俗芸能は
 美しくも不思議な世界を創り出す



山の離れ小島

見渡せば、そそり立つ岩肌や深い谷、あるいは天に向かう木立や深い森、大歩危・祖谷の地は周辺の地域から孤立してきました。でなく、それぞれの集落が自然環境に隔てられました。ですから、その集落ごとに個性的な伝統芸能や祭りなどが伝わっています。閉ざされた森の舞台で始まる季節の祭り、それらはその昔に日本のあちこちで見られた懐かしの情景かもしれません。

森の絵物語

もしかしたら神代から続いてきた踊りでしょうか。それほどに歴史を感じさせる「神代踊り」じんだいおど。もともとは、笠踊り、太鼓踊りと呼ばれていましたが、大正時代に当時の皇太子（後の昭和天皇）の前で披露するという栄誉に恵まれ、「神代踊り」と呼ばれるようになりまし。かつては、各地で踊られていた雨乞い踊りの素朴な姿をとどめる、国の重要無形民俗文化財です。



なつかしの宵

そこは、真正正銘の森の孤島。深い木立に囲まれて、昼なお暗い後山の四所神社。阿弥陀堂の農村舞台がある広場だけ、まあるく青空がのぞきます。夜の帳が下りると降るような星空。けれども、今夜は月も星もかすみません。なぜならば、祭りのかがり火や提灯が赤々と点っているから。秋風が身にしむ季節、お接待の甘酒をすすりながら、温かい感動に浸る「襖からくり」。すっかり忘れていた「なつかしい祭りの宵」がここにあります。

かつて、日本中で人形浄瑠璃がもてはやされた時代がありました。激しい恋の道行きも艱難辛苦の人生も人形が演じることで、より感情移入することができました。それは、現代のアニメに通じるものがあるのかもしれませんが、現代のアニメの中では、やがて村の人々が自分たちの手で舞台を作り、人形を操り、その背景のふすま絵を描きました。その舞台駆換を工夫している内に、糸を操って背景の襖絵を変えていくという「襖からくり」が誕生したのです。



祖谷の襖絵は、明治後期から大正時代の作とされています。徳善や田ノ内地区など五ヶ所に約三百枚が保存されています。特に後山では保存状態の良い襖絵が緑棚の下から多数見つかりました。地元の人々が毎年、一枚一枚の襖絵や垂れ幕を虫干し続けたおかげです。同時に、舞台の部材なども発見され、復元ができませんでした。そして、祖谷襖からくり保存会により襖からくりの妙技を、今も見るすることができます。



森の中の広場で色とりどりの衣装を着けた人々が、ひとりひとりと躍り出て輪になります。まるで懐かしい絵本のように見える「神代踊り」。踊りが終われば、またひとりひとりと森に消えていくように輪を離れて行きます。毎年旧暦の6月25日に普徳の天満宮神社で行われています。

